

中東文化交流・対話ミッション

「報告と提言」

平成15年10月

目次

I. はじめに

II. 中東地域全体に対する施策提言

1. 腰をすえた総合的取り組みの必要性
2. 現実に効果のある文化力の発信
3. 人間開発・教育の重要性
4. 戦略的な招聘事業の実施とわが国への訪問者の飛躍的拡大
5. 中東地域に対する理解の促進
6. 中東との文明間対話ネットワークセンターの設置

III. 今次訪問国に関する報告と提言

1. サウジアラビア王国
2. イラン・イスラム共和国
3. シリア・アラブ共和国
4. エジプト・アラブ共和国

I. はじめに

21世紀初頭の現代世界は、未だに冷戦が終結した後の新しい国際秩序のあり方を模索し続けている。世界経済は、秩序が安定して初めて持続的な成長が可能である。しかし、残念ながら、現在のところ、国際秩序は安定しているとは言い難い。なかんずく中東情勢は、イラク問題や中東和平問題等をはじめとして大きな不安定要因となっている。このような中であって、わが国としては、中東の安定ひいては国際秩序の安定に貢献するために、中東諸国との関係を今一度総点検し、わが国の力を全て結集した総合的な政策を展開すべき時期に来ている。

我々中東文化交流・対話ミッションのメンバーは、このような問題意識を持って、9月19日から10月1日にかけて、サウジアラビア、イラン、シリア、エジプトを訪問してきた。各地では、「伝統と近代化」というテーマの下に、シンポジウムと対話を行ったのである。わが国は、明治以降、伝統的価値と西欧的近代化の相克の問題に直面し、これを克服してきた経験がある。現在、中東諸国は、まさに、宗教的価値を含む伝統的価値と西欧的近代化との間の相克の問題に対峙している。今次ミッションの目的は、わが国の経験をこれらの国と共有し、相互理解を深め、もってわが国の対中東外交の基盤を強化することにあったが、その第一歩は順調に踏み出したといえるであろう。

わが国は、過去様々な文明・文化との交流・融合を通じて発展してきた。我々ミッション・メンバーは、国際社会全体が、各文明・文化の多様性を認め、互いに尊重し合いながら交流を深め、いわば文明・

文化の「地平融合」と「創造的調和」を目指さなければならず、そのためにわが国はリーダーシップを発揮すべきであるとの思いを新たにしながら帰国したのである。

各国訪問を終え、我々ミッション・メンバーは、中東諸国との関係強化に関し、特に以下のことを提言することと致したい。

Ⅱ. 中東地域全体に対する施策提言

1. 腰をすえた総合的取り組みの必要性

今回のミッションを通じ、改めて認識し直したのは、中東地域と西欧地域の深く重層的な関係である。ユダヤ教、キリスト教及びイスラム教の3宗教が中東に生まれたという事実、そしてフェルナン・ブローデル著の「地中海」を引用するまでもなく、中東地域と西欧地域は謂わば一体と言って良いほど複雑に絡み合った長い歴史的関係を有している。現在においても、その在留民数、航空便数をはじめとする交通の往来を例にとっても明らかなように、わが国と比べて圧倒的に重層的関係が両地域の間には結ばれている。日本は歴史的なしがらみが無いだけに「新鮮な」関係を築けると言えなくもないが、このような両地域の関係がある上にわが国と中東諸国との関係を築くには、相当な覚悟をもって、長期的な展望をもちながら腰をすえて取り組む必要がある。この点、今回のミッションにおいては、わが国の伝統と近代化に関わる価値観を中東諸国に対して紹介することが出来たと考える

が、今後交流を進めるに当たっては、中東地域の人々の心をつかみ、同じアジアに属する国として共通の価値観があることについても相互に理解を深め、中東諸国の関心が西から東へ向くようにすることが基本的に重要である。

第二次世界大戦後のわが国が、アジア諸地域（中国、韓国、アセアン諸国）の近代化に果たした役割は非常に大きなものがあったが、その貴重な実績を中東地域に対する総合的戦略の糧とする視点も重要である。我が国の近代化が人間開発に始まり、経済開発の素地を作ったその後の発展に至ったモデルは、中東地域の発展においても考慮されるべき重要なものである。

このような観点から、現在官民の様々なレベルで行われている中東地域との交流・協力を一元的に捉え、相互に協調・協力しながら総合戦略として進めて行くことが、効果的に関係を築き上げていく上で必要である。また中東と西欧の緊密な関係に鑑み、いずれかの段階で、西欧を巻き込んで、多国間レベルにおける交流・協力を進めることも検討に値しよう。

2. 現実の効果のある文化力の発信

中東諸国との関係を構築する上で、わが国の有する総合的な文化力を活用し、発信していく必要がある。ここに言う文化力とは、「物づくりも文化」との考えを含むソフトパワーとも言うべき総合的な力である。今次ミッションもこのようなわが国の文化力の発信であったとも

言える。この文化力による交流は、狭義でいう政府間レベルの外交の範囲を超え、国民全体の文化にかかわる総合的な外交と考えることもできよう。このような文化力による関係の構築は、国際秩序維持のまさに基礎を支えるものとなる。

この関連で、今後、この種の文化交流・対話ミッションを派遣するに際しては、今回同様、中東イスラム地域の専門家だけではなく、幅広い分野にわたって日本のあり方を現実的に説明できる識者をバランスよくメンバーに含めることが必要である。同時に、今後は、日本の歴史と現実をきちんと中東イスラム世界の問題と関連づけながら外国に説明できる専門家の育成が不可欠であろう。また、シンポジウムの現地参加者に関しては、実際に現場で近代化の問題に直面している産業人を加える等、現実在即した実地の議論も行えるよう工夫してもらいたい。更に、文化力の発信という観点から、様々な機会をとらえ、芸術家、職人、企業家等を始めとしたわが国の各界で活躍している人の姿・考え方を中東地域に紹介していくことが有益であろう。

中東地域における日本文化の発信能力の強化も必要である。その為には、国際交流基金事務所の拡充等日本文化の発信拠点の充実、NHK衛星放送・その他テレビ番組のアラビア語版・ペルシア語版・トルコ語版等による放映、日本を紹介するアラビア語・ペルシャ語版定期刊行物の発行、日本を知るための日本語書籍のアラビア語翻訳事業の大々的な組織的推進（例えば、「日本を知る100冊キャンペーン」の実施など）等が望まれる。

3. 人間開発・教育の重要性

近代化・発展のためには、経済的な発展と人間の開発が必要であり、なかんずく後者は前者の礎となるものである。UNDP（国連開発計画）は、昨年、アラブ諸国の人間開発報告書を発表した。過去30年の進展を評価する一方で、50%以上のアラブ女性が識字能力をもたず、幼児死亡率がラテン・アメリカ諸国の2倍であり、過去20年間の一人当たりGNPの伸びが極めて低い等、他の地域と比較して発展が遅いことを問題にしている。そして人間開発を遅らせている3大要因として、良い統治（ガバナンス）、女性の地位・能力の強化（エンパワーメント）、及び知識へのアクセスを挙げている。人間開発の基本は教育であり、まさにわが国が近代化の過程において最も重視してきた点である。識字・基礎教育から広く人格教育に至るまで、総合的な取り組みが必要とされており、わが国として、今後とも、わが国の経験を生かしたこの分野での協力の強化が望まれる。

この点、カイロには、1919年に創設されたカイロ・アメリカン大学、1880年に設立されたフランス東方考古学研究所が存在することを指摘したい。ドイツも、ムバラク＝コール・イニシアチブの下、1991年以来、教育・技術訓練の分野における協力を進めてきたが、本年10月、カイロ・ドイツ大学を発足させた。わが国も国立文化センター（オペラハウス）、カイロ大学付属小児病院の設立をはじめとして、人間開発の分野でこれまでも協力してきているが、引き続き協力のあり方を検討していく必要がある。

また一方、人間開発のためには教育のみならず、ヘルスケア（医療・衛生）、生活インフラ（水・電気等）の整備も重要であるが、これらについて日本として積極的な対応が必要であることはいうまでもない。

さらにこうした対応を具体化する際、従来のODA対象国の制限を緩和する、あるいは別の方策を活用するなど、ODA非対象国への支援体制を見直すべきである。

4. 戦略的な招聘事業の実施とわが国への訪問者の飛躍的拡大

中東地域におけるわが国に対する理解は、まだまだ十分でない。わが国が伝統と近代化を如何に調和させてきたかを知ってもらうには、やはりわが国を訪問し直接自分の目で見るのが最も効果的である。中東地域からは、文部省国費留学生をはじめとして、様々な招聘事業が行われているが、官民協力の下、世論や政策の形成に影響力のある各界の指導者層を戦略的に招待する等、招聘事業の充実・拡大が必要であろう。同時に、このようにしてわが国を訪問した中東関係者のデータベースの構築、維持、更新の仕組みを作り、これら関係者と長期的にわたり継続的に接触する努力も必要である。

また中東地域の人々が、自ら進んでわが国を訪問したくなるような環境を整備することも重要である。政府は、現在観光立国を宣言し、ヴィジット・ジャパン・キャンペーンを実施しているが、スイスに避暑に行く中東地域の人々を、むしろ日本に来させるといった具合の訪問者の飛躍的拡大を図る努力が必要である。その際、政府は、中東地

域の都市と姉妹提携のある市町村、外国人観光客の誘致に関心のある地方自治体や NGO との連携を強化しながら、中東地域からの訪問者の拡大を積極的に推進すべきである。

5. 中東地域に対する理解の促進

今回のミッションでも痛感させられたが、中東地域の人々の間には、わが国を含む国際社会において、イスラムの宗教及び文化を始めとする同地域に対する理解が十分でないという思いが強い。日本人も、一般に、一部のイスラム過激派・原理主義者の言動の故に、イスラム及び中東地域に対する誤ったイメージを抱きがちである。相互理解は、互いの実体についての正しい理解があって初めて成り立つ。イスラムの宗教及び文化を含む中東地域に対する日本人の正しい理解を促すために、教育のあり方を含めた積極的な施策を講じる必要がある。

6. 中東との文明間対話ネットワークセンターの設置

中東諸国との交流・対話は、今回のミッションのようなものにとどまらず、恒常的に、幅広い関係者の参加を得て、様々な形態で行うことにより、大きな成果を生み出すことができる。そのためには、既存の地域研究者同士の交流に加え、世論形成や政策形成を現実的に担う学者・有識者・ジャーナリスト、政策立案者等の幅広い層の知的階層を巻き込んで知的交流事業を推進していく必要がある。また前述の通

り、現在官民様々なレベルで行われている中東諸国との交流・対話は、総合的な調整が行われることにより、より効果的なものとなる。

以上の点を踏まえ、長期的には中東地域との交流・対話の拠点となるような文明間対話センターを我が国に設置することを検討すべきである。同センター設置までの間、当面は、交流・対話のためのネットワークセンターを立ち上げ、官民各機関が行う中東との交流に関する情報を一元的に把握すると共に、必要に応じ各機関の事業の実施、事業の相互調整の手助けをし、また、中東地域に対する日本国民の理解を促すための事業を行うようにすべきである。

Ⅲ. 今次訪問国に関する報告と提言

1. サウジアラビア王国

概要報告

(1) 「日本・サウジアラビア関係、伝統と開発」とのテーマの下、シンポジウムを開催したが、厳格なイスラム教義の下にあるサウジアラビアにおいて、公開のシンポジウムが開催出来たこと自体、画期的なことであった。日本側より、「伝統的価値と近代化の問題」、「文明間の対話、文明・文化の融合」、「明治以来の我が国の経験」、「人間開発・教育の重要性」、「寛容性」といった問題提起を行ったのに対し、サウジアラビア側よりは、経済協力及び学術交流を始めとする日・サウジアラビア関係に関する実績紹介的な説明が行われた。これ

と同時並行的に、森英恵デザイナーによる女性を対象にしたセミナーが開催されたが、「ルーツを大切にしながら世界で生きていく」という同デザイナーの人生哲学は、出席したサウジ女性の強い共感を呼んだ。

(2) 今回の訪問で特に印象的であったのは、サルマン殿下（リヤド州知事）、ムハンマド・アルファイサル殿下（ファイサリアグループ社長）、バンダリ妃殿下（キングハーリド慈善団体事務局長）の開放的、開明的態度であった。サルマン殿下は、例えば、「世界の問題を見るに、多くは二国間の理解が不足していることに起因している。日・サウジアラビア間には、経済交流はあるが、更に文化的交流を強化していくことによって、お互いの国の背景にある伝統や習慣についてより深く理解することが出来る。／自爆テロには賛成しない。／他人に対して宗教を好き嫌いの理由にしてはならない。／日本と同じように、あらゆる国が軍事費のために資源を使うのではなく、国の経済成長、国民所得の増加に専念すべきである。」等と述べられた。ムハマンド殿下も、「文化には、垂直的文化と水平的文化の2種類がある。／人々は、この急速な変化の時代には、祖先から引き継がれた垂直的文化にしがみつく。／しかし、必要なのは国境を越えた異なる要素との接触による水平的文化であり、過去の大国、例えばローマ帝国にしても、水平的な異文化であるギリシャとの接触によってその栄華を実現した。」旨述べられた。このような開明的な指導者層との協力関係を維持・発展させていく必要がある。

(3) また、諮問評議会（日本の国会に相当）のシャッタ副議長を訪問した際、同席した複数のサウジアラビアの議員より異口同音に日本・サウジアラビアの「技術分野での交流（自動車整備訓練学校等）」が評価され、交流レベルのさらなる高度化を望む意見が出された。このような技術分野での交流ニーズは、サウジアラビアに限らず、中東地域全体に共通するものである。

(4) なお、訪問全体を通じ、サウジアラビア側より、過激派の活動等の故に、イスラムの宗教と文化に対する正しい理解が得られていない現実に対する懸念・不満が表明された。同時に、近年、わが国におけるイスラム、中東に対する研究が急速に進んでいるのに対し、サウジアラビアにおける日本研究の遅れが痛感された。

提言

以上のことを踏まえ、サウジアラビアとの文化交流については、特に次のことを提案したい。

(1) 2005年が日・サウジアラビア外交関係樹立50周年に当たることを踏まえ、女性なども参加する市民レベルをも含めた日・サウジアラビア相互理解の促進、サウジアラビアの開放化の努力に資するような交流の促進を図るべきである。

具体的には、

(2) 今回のような文化交流・対話ミッションとシンポジウムを継続することに加え、「女性のためのファッション・ショー」、「少年によるサッカー交流」等を検討すべきである。

(3) また、日本研究、特に伝統的価値を維持しながら近代化を達成したわが国の経験が、広くサウジアラビア国民に共有されるような日本研究の促進を助言すべきである。

(4) 更に、サウジアラビア側には、イスラムの宗教と文化をはじめとするサウジアラビアの正しい姿が理解されていないという不満もあるが、日本国民のサウジアラビアに対する理解の促進につながるようなシンポジウム、その他の交流も積極的に展開していく必要があるだろう。

2. イラン・イスラム共和国

概要報告

(1) イランにおいては、「伝統と近代化ー共存は可能か」というテーマの下にシンポジウムを開催したが、同国においてもこの種の公開シンポジウムの開催は、ほとんど前例のないものであった。日本側よりは、歴史に基づいた現実主義的な観点から近代化の経験の紹介・分析を行ない、教育の重要性について指摘して、わが国の教育・文化・科学技術立国の考え方を強調したのに対し、イラン側よりは、「近代

化とは何か」、「伝統とは何か」といった基本的認識に係わるプレゼンテーションが行われた。

(2) またハタミ大統領の側近であるアブタヒ法律・国会担当副大統領を表敬訪問したが、同大統領夫人であるムーサヴィーネジャード宗教間対話センター所長も同席し、和やかな雰囲気の下、会談が行われた。同副大統領が、「イラン及びこの地域は、他の地域に増して戦争に代わって対話が必要である。／イスラムの名の下に暴力やテロを行うものがあるが、イスラムの名が汚されていることを憂う。／我々はサダム政権の崩壊を喜んでいるが、イラクではイラク国民自らが統治することが重要である。／イランは人口の97%がイスラム教徒であるが、それにも拘わらず他の宗教を理解する必要がある。世界はお互いを必要としている。」と述べられていたことが、印象的であった。

(3) わが国としては、同国の近代化、開放化の努力に資するために、時間はかかるかもしれないが、地道に交流を続ける必要がある。この点、ハタミ大統領の提唱した「文明間の対話」を積極的に支持し、今回の対話ミッションのような文化交流を継続していく必要があろう。

(4) 更に交流を進めていく上では、イランの次世代の中に潜在的に近代化に対する強い関心、憧れがあることを踏まえ、対応していく必要があろう。

提言

以上のことを踏まえ、イランとの文化交流については、特に次のことを提案したい。

(1) 今回は最初の試みであったが、この種の文化交流・対話ミッションの派遣及びシンポジウムを継続することにより、より有益な効果を期待できる。今回のシンポジウムにおけるイラン側の参加者は、すべて学者であったが、次回以降は、近代化の問題に現場で直面しているビジネスマン等、より幅広い分野の人を含めてシンポジウムを開催できれば、近代化の意味を現実主義的な観点から考える上で有効であろう。

(2) 近代化についての理解を深めるためにも、世論と政策の形成に影響力をもつイランの各界、可能であれば宗教界の指導層を含めて、わが国に積極的に招待すべきである。また日本研究を助成するとともに、日本の近代化の過程に関する本を翻訳・紹介するなど、幅広い層に近代化について豊富な実例を紹介するための努力も必要である。また女性デザイナーによる講演とファッションショーのような交流も有益であろう。

3. シリア・アラブ共和国

概要報告

(1) シリアにおいても、「伝統と近代化」というテーマの下でシンポジウムを行ったが、聴衆からわが国の中東政策に関する質問がなされるなど、率直な意見交換を伴う良い議論を行うことが出来た。またシンポジウム終了後、代表団一行に対し、中東和平やイラク問題を中心にテレビ・インタビュー及び新聞記者取材が長時間にわたって行われ、本件シンポジウムに対する関心の高さが伺われた。

(2) 更に、今回の訪問で特筆すべき点は、シリア宗教界の最高権威者キフタロー師を表敬訪問するとともに、同師の案内の下、モスクにおいて、金曜日の礼拝のために集まった約3000人のイスラム教徒の前で、代表団一行が挨拶を行う機会を与えられたことである。このようなことが実現できたのは、恐らく、シンポジウムにおける代表団一行の発表がシリア側に好印象を与えていたからであろう。またそこには、文明の十字路として4千年以上にわたり様々な文明を経験し、イスラム教とキリスト教が長い間共存してきたシリアらしい特徴が表れていると言えるであろう。

提言

以上のことを踏まえ、シリアとの文化交流については、特に次のことを提案したい。

(1) シリアには伝統的に宗教的・文化的寛容性が存在するとはいえ、米国をはじめとする他国との対外関係は難しいものになっている。人は生活にゆとりができて、初めて他人に対しても寛容になれる面がある。幸いシリアにおいては、文化的活動に関する規制は殆どないことから、わが国としては、今回のようなミッションの派遣及びシンポジウムの開催を継続することは勿論として、シリアの人々の心を豊かにするような知的交流、芸術作品の展示、伝統芸能、演劇、音楽、映画・テレビをはじめとする映像芸術等幅広い文化交流を推進していくべきである。

(2) 他方、シリアはわが国において余り知られていない。文化交流は双方向で行われるものあり、日本国民にシリアの文明・文化を紹介する努力、例えば日本でのシリア展開催、遺跡発掘・保存分野での協力や、世論形成に影響力をもつ知識人などの識者招聘や青少年のスポーツ交流など具体的な文化交流の強化も必要であろう。

4. エジプト・アラブ共和国

概要報告

(1) エジプトでは、他国と異なり、「日本とエジプト及びグローバル化のインパクト」のテーマでシンポジウムを行った。世俗化の進んでいるエジプトにおいては、伝統的価値と近代化の相克の問題よりも、むしろグローバル化のプラス面及びマイナス面に

関する議論に焦点が当てられたこととなった。

(2) オベイド首相との会談では、同首相より、わが国のこれまでの各種の協力に謝意が表明されると共に、今後戦略的に両国関係を構築していく必要があるとして、農業、商業、投資、森林化テクノロジー、技術移転、人材育成（含むシルバー人材育成）、医療（医者、看護婦の研修）、観光振興（日本村の設立）等の幅広い協力での協力の可能性が提示され、なかんずく教育分野での協力の必要性が強調された。また宗教的最高権威者であるタンターウィ・アズハル大学総長を表敬訪問したが、同総長は、パレスチナ問題につき当事者が交渉のテーブルにつくことが大切であるとし、中東和平問題に対する日本の立場に感謝する旨述べられた。

(3) またカイロ・アメリカン大学とフランス東方考古学研究所を視察したが、それぞれ1919年、1880年に創設されており、欧米諸国と中東地域の関係の深さを改めて痛感した。なお、ドイツは、既に約30の高校でドイツ語教育が行われているが、この程カイロ・ドイツ大学を発足させた。また中国についても、2002年にカイロに中国文化センターを開設している。

提言

以上のことを踏まえ、エジプトとの文化交流については、特に次のことを提案したい。

(1) かなりの程度世俗化しているエジプトは、現在まさに開発の問題に直面しているといえるが、開発を成功させるためには、まず人間開発、教育が基本となる。上記の通り、カイロに教育・研究の拠点を有している国があるが、わが国としても、長期的には、何らかの形の中東諸国に対するこの分野の拠点を設置することを検討してしかるべきである。この点、カイロ大学に既にあるアジアセンター及び日本語学科との何らかの連携を考えることも一案である。

(2) またエジプトは、中東メディアの拠点であることから、汎アラブ衛星放送等との協力を積極的に行っていくべきである（日本の番組提供、メディア関係者招聘など）。その際「プロジェクトX」など日本の発展経験を分かち合えるような番組の提供を検討すべきである。

(了)

(別添 1)

中東文化交流・対話ミッション・メンバー

- ・ 団 長 : 山内 昌之 東京大学教授

- ・ 最高顧問 : 根本 二郎 日本経済団体連合会名誉会長
日本郵船株式会社名誉会長
中東協力センター会長

- ・ 団 員 : 森 英恵 デザイナー

- 森本 公誠 東大寺上院院主

- 北岡 伸一 東京大学教授

中東文化交流・対話ミッション：主要日程

<サウジアラビア王国>

9月20日(土)

- 午前
- ・サルマン・リヤド州知事表敬
 - ・ムハンマド・K・A・アルファイサル殿下（ファイサリアグループ社長）及びバンドリ妃殿下（女性NGOキングハーリド慈善財団事務局長）表敬
- 午後
- ・バンドル・ビン・サウド殿下（キングファイサル財団副事務総長兼事務長）表敬
- 夜
- ・シンポジウム第1部
テーマ：「日本・サウジ関係、伝統と開発」
場 所：キング・ファイサル・センター
サウジ側代表：ムハンマド・アルハバイ・イマーム大学副学長
 - ・女性のためのセミナー
テーマ：「グローバル時代の女性」
場 所：キング・ファイサル・センター
主催団体：ナハダ女性協会（女性のための慈善団体）

9月21日(日)

- 午前
- ・シャッタ諮問評議会副議長表敬
及び諮問評議会見学

- 午後 ・ リヤド国立博物館視察
- 夜 ・ シンポジウム第2部
- テーマ等第一部と同じ

<イラン・イスラム共和国>

9月23日（火）

- 午後 ・ アブタヒ法律・国会担当副大統領表敬
- ・ シンポジウム開催
- テーマ：「伝統と近代化：共存・融和の可能性」
- 場 所：文明間対話国際センター図書館
- イラン側代表：モハンマド・レザー・テヘラン大学人文学部教授

<シリア・アラブ共和国>

9月25日（木）

- 夜 ・ ムルタダ高等教育大臣表敬
- ・ シンポジウム開催
- テーマ：「伝統と近代化」
- 場 所：高等教育省
- シリア側代表：シャッラーフ・商業会議所連盟会長

9月26日（金）

- 午前 ・ キフタロー・シリア共和国ムフティ表敬

<エジプト・アラブ共和国>

9月27日(土)

午後 ・ アニス・マンスール「アル・アハラーム」紙論説委員
との面会

9月28日(日)

午前 ・ カマル・アブル・マグド・アラブ連盟文明間対話担当
コミッショナーとの面会
・ カイロ・アメリカン大学視察
・ 仏東方考古学研究所視察

午後 ・ 邦人記者との懇談

9月29日(月)

午前 ・ カイロ大学日本語日本文学科視察
アジアセンター視察
・ シンポジウム開催
テーマ：「日本とエジプト、グローバル化のインパクト」
場 所：カイロ大学学生寮附属会議センター
エジプト側代表：ハダ・メキース・カイロ大学アジアセンター副所長
・ オベイド首相表敬

午後 ・ タンターウィ・アズハル総長との面会